
Link

タトルト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Link

【Nコード】

N0216I

【作者名】

タトルト

【あらすじ】

どこにでもある普通な高校生、橘凜玖はひょんなことから男子と上手く話すことができない転校生、橘七夕と兄妹になってしまう。兄弟の2人が繰り広げるドタバタ恋愛ストーリーをめざします。…僕らはきつと同じ時を繰り返す、永遠かも一瞬かも分からないこの時を繰り返す。でも怖がらないで恐れないで…僕を信じて…自分を…信じて。きっと僕らはいつだってLinkしていられるから。

第1話 はじまりはいつも朝（前書き）

初めての小説なのでとても読みにくいとは思いますがなにとぞお願いします。

第1話 はじまりはいつも朝

ある日、ある朝、ある街、ある家に1人の少年がいた。

「や、ヤバイ……………遅刻しちゃうよ」

少年はベッドから飛び起きて自分の部屋がある2階から1階に瞬く間に降りていった。

この朝から忙しい少年……………一応この小説の主人公 橘 凜玖 「タチバナ リンク」である。この凜玖君……………朝に非常に弱い高校2年生。帰宅部で成績は中の下ぐらいどこにでもいる普通な高校生だ。

今日も今日とて朝寝坊をしてしまった凜玖君は超スピードで朝の支度をしています。寝坊しないように両親や可愛い幼馴染や可愛い妹が起こしてくれないのかという……………誰も起こしてくれない。

彼の母親は彼がまだ幼かった頃に亡くなってしまっていて、父親も父親で仕事で家を空ける事が多くほとんど家に帰ってこない。しかも彼には近所に子供の頃から仲がいいツンデレ幼馴染もないし兄を溺愛するブラコンな妹もいなかったりする。

……………という訳で彼はいつも遅刻ギリギリな生活を送っているのだ。

「……………マズイ……………完璧に遅刻コースをまっしぐらしてる」

いくら頑張つて準備しても無理があるわな……もつと早く起きればな~~~~。

……なんて愚痴を考へてる時間すらもつたいない、早く家を出ないと。

何とか準備を終えた俺は家の扉を開けて外にでた。……つと忘れるところだった。

「……んじゃま行つてきます」

まあ……誰もいないんだけどね……一応子供の頃に母親に教えてもらったことだからさ。

別に母親がいなかったら寂しい訳じゃないよ。そりゃ……子供の頃は寂しかったけど……俺ももう高校生だ。母親の面影だって忘れていく。

……でも全部忘れることないよね。大切な想い出ぐらいは覚えておかないとそれこそ何だか寂しいし悲しいしさ。

……話しがなんだか暗くなっちゃったけど、結局のところはもう母親のことは大切な想い出以外をいい意味で何とも思つてないってことだけなんだよ。

この物語の主人公である凜玖君は朝から家の玄関で1人感傷に浸っていました。

でも忘れないで……君……遅刻しかけてるんだよ。

「わ、忘れてた…………ち、遅刻する」

こうして凜玖君は朝から忙しく学校に向かって行きました。

ただ……………朝の凜玖君は今日から自分におこる今までの生活を――
変させる様な事件が起きるとは夢にも思っていませんでした。
……………というか知るよしもなかったのです。

第2話 無口さんと遅刻魔（前書き）

第1話とだいぶ話の長さがちがってすいません。

第2話 無口さんと遅刻魔

さて……………朝からドタバタしていた橘 凜玖君。

ただいま猛スピードで学校の階段をかけあがっております。

「ハア…………ハア…………間に合ってくれよ……………」

俺はスピードを緩める事なく突っ走り一気に教室のドアを開けた。

「お、おはようございます……………」

とりあえず教室に入り挨拶をしたもののやっぱり朝のホームルームは始まっていた。……………皆の視線が痛いよ。

クラスメートの冷めた視線はともかく俺はいつもと違う事を発見。

教卓の隣にまったく知らない女の子を確認。

やっぱりこの展開だと転校生かな…………パッチリ二重に肩より少し長いくらいの黒く綺麗な髪、前髪もけっこう長いな…………身長は結構低めで雰囲気的にはあんまり活発に話したりしないおとなしい感じに見えるな。

「はあ……………凜玖また遅刻か……………」

俺が見ず知らずの女の子を観察していると我がクラスの担任である

黒井先生が俺に溜息をぶつけてきた。ちなみに女の先生だよ。

「す、すいません……何とか頑張って起きようと努力はしてるんですが………」

いや本当に努力はしてるんですよ。是非とも俺の部屋にある目覚まし時計君達を紹介したいぐらいですよ。

「……まあ許してやろう、今日は1限目が始まるまでに来たし……それに見ての通り今はお前に構っている暇はない！」

そう言う先生は視線を俺からクラスメート達に変えて何やら話し始めた。……どうやら転校生の紹介してるみたいだ。

……それにしたって先生……冷たすぎるよ。

俺は朝からちょっとブルーな気持ちになりつつ教室の1番後ろにある自分の席に避難していった。

「また寝坊………アホ凜玖」

俺が席に着くと同時に俺の真ん前の席に座っている 須方 恵海
「スガタ エミ」が話しかけてきた。ちなみに俺と恵海は小学校からクラスがずっと同じなんだ。……マジで凄い腐れ縁だと思うよ

まあちなみに容姿は結構いい、この学校でもベスト5に入るぐらいじゃないかと思う。顔の部品も整っていてどちらかというと美人系かな。全体的にすらっとした体格に鋭い眼……迫力あるわ。まさに

女子の頼れる姉貴的なポジションです。

「まあ遅刻なんていつもの事だしね」

「開き直るなバカ」

彼女は捨て台詞を言っ
て前を向いてしまいました。
しかし俺って本当に立場弱
い……泣きたくなるよ。

「勝手に泣いてるアホ凜」

「普通に人の心読まないで！」

なに……読心術でも心得てるんですか……。

そうこうしてるうちに先生の転校生紹介は終わってしまった。ヤバいな……前半話し聞いてなかったから名前が分らん……まあ何とかなるか。

「よしじゃあ席は、さっき遅刻してきた奴の隣が空いてるからそこに座って」

「……わかりました」

~~~~~  
ンチ!!!!!!  
そして先生、俺の扱い雑すぎるよ!!!!!!

そんな俺の葛藤も知らずに名前を知らない転校生の女の子は俺の隣にすわってしまった。

「え、え〜と……よろしくね」

《コクン》

女の子は俯きぎみに首を縦に振った。

わあ〜何か俺嫌われちゃったかな……。

「あと俺さ遅れて来たから君の名前が分らないんだけど……教えてくれる？」

女の子は暫しの沈黙の後ゆっくりと顔をこちらに向けて口を開いてくれた。

あれ……前髪が長くて遠目からだとよく見えなかったけどけっこう可愛い……もしかすると恵海以上かも。

「私の名前は……七夕……橘 七夕「タチバナ ナユ」」

その女の子は途切れ途切れではあったがゆっくりと名前を教えた。

ってかまさかの俺と同じ名字だったよ。

「凄い偶然、俺の名字も橘なんだよね」

《!?!?!》

橘……さん？は俺のことを聞いて声にこそ出さなかったがとても驚いた表情をしていた。……そんなに珍しいかな？

「な、名前はたしか……リンク君？……だよね？」

橘さんは驚きとも喜びとも悲しみとも何とも言えない表情で俺に尋ねてきた。

「そうだよ凜玖だけど、どうかした？」

「……い、いや何でも……ない……です」

そうして橘さんは少し戸惑った表情を残しながら会話を終わらせてしまった。

うーん……俺何か変な事言っただかな？???

### 第3話 なんやかんやの法則（前書き）

けっこうな短さです……。

### 第3話 なんやかんやの法則

何故だか分らないけど橘さんとの仲がいきなり気まずくなりそのまま昼休みに突入。

ちなみに橘さんは昼休みに入るなり恵海がどっか連れていつちやいました。

さすが恵海だ、俺以外には優しい……。

「よし昼飯食べようぜ!!」

俺がまたブルーな気持ちを爆発させていると俺の友達 小池 隼「コイケハヤト」がテンション高く声をかけてきた。

「はあ……お前はいいよな、悩みなんか無さそうでさ」

「うん？ 何か言ったか？」

「…………別に」

……隼はもう弁当を食べ始めていた。

このハヤトっち相当抜けててアホなのにスツツゴイもてるんですよ。とりあえずイケメン君なんで女子に受けがいいんですよ。

つてか男女ともに人気ありますねハヤトっちは、俺なんかと大違いですよ……。

まあ、いわゆる凄い絡みやすい奴なんですよ。

「しっかし凜はイイな……」

どこにイイところがあるんだよ。お前の方がよっぽど羨ましいわ。  
あと、ちなみに俺は友達からたまに凜とか呼ばれます。

「何が？」

「何がって……七夕ちゃんと話せたことだよ！」

「ああ……そんな事ね」

たぶん、話す代償によりかなりの確率で嫌われちゃったけどね。

「そんな事じゃないわ！！ あの……あの七夕ちゃんだぞ！」

頼むからそんな大声だすなよ……って聞いてないか……。

「あの長く綺麗な髪に、今にも引き込まれそうな大きな瞳……超可愛じゃないか」

「ならお前が話しかけりゃいいだろ？」

俺は呆れながら答えた。

「俺じゃダメなんだよ、どうやら七夕ちゃんは男子が苦手らしくて、俺が話しかけようとする女子達の方に逃げちゃうんだよ……という訳で今、七夕ちゃんと話しができた男子は凜だけなんだよ！」

「分った分った、とりあえず落ち着け」

隼の顔は興奮してか凄く真っ赤になっていた。

隼はなぜかよく顔を真っ赤にするんだよ……いわゆる隼の法則だ。

「これが落ち着いていられるか！だいたいお前はな……」

はあ……ダメだ。こう話したと隼の奴は止まる事を知らない。…

…隼の法則だな。

こりゃ昼休みが終わるまでほっとくしかないな。

ってな感じで俺の昼休みは隼を宥めることで終わってしまった。

その時、俺は自分に向けられている

憂慮とも安堵とも感じ取れる怯懦な視線に気付くことはなかった…

…気付くことができなかった。

もしかすると……

僕らはこの時を

星の数ほど繰り返す日々を

もう……Linkし始めていたのかもしれない。

### 第3話 なんやかんやの法則（後書き）

主人公の友達紹介ってけっこうなお決まりですよね。  
……いわゆる隼の法則です。

#### 第4話 自分を褒め称えたい

何とか俺は隼を宥めながら学校の終わりであるホームルームまで持ち堪えることができた。

うん……偉いよ俺。

ちなみに橘さんは、ときどき俺の方をちら見してまた視線をずらす作業を繰り返しておられました。

何か異様な気まずさがあるんだよな。

まあ……何はともあれ、とりあえず最後の力を振り絞って我が担任でおわせられる黒井先生のお話を聞いています。

「よし、じゃあ今日はこれで終わるけども……凜玖、お前は今日遅刻してきた罰として橘に学校の案内をしてやれ」

わあ……何だか凄い衝撃的な事をお伝えになりましたよ、あの先生。

「ちょ、ちょっと待ってください、そんなのありですか……だいた橘さんも僕なんかじゃ嫌なはずです」

俺は懇願の思いに溢れた眼差しで橘さんを見た……が……。

#### 《フルフルフル》

予想外にも橘さんは首をもの凄いスピードで横に振りまわります。あなたは気まずくないんですか……。

「よし決定だな、ちゃんと案内してやるんだぞ、他の奴らは解散、

気をつけて帰るんだぞ」

黒井先生はもの凄く黒い笑顔を浮かべておられました。

……ってかいったい何が狙い??

「ちょっと恵海ちゃん!! 助けて!!」

困った俺は恵海に泣きついてみました。……が恵海は、いかにもコイツめんどくさい的な目で俺を見ってきます。

しかもそのまま恵海の奴、俺に一言も言葉をはつすることなく橘さんに何か耳打ちしてそのまま部活にいつちやいました。恵海のバカヤロ〜。

あとついでに隼にも凄い睨まれました。

その後も数名のクラスメート達に睨みを利かされながらも、めげない俺はとりあえず橘さんに話しかけました。

「と、とりあえず行こっか」

## 《コクコク》

橘さんは数回頷くと俺の後ろについて歩いてきます。

何とか気まずい雰囲気から脱しようと学校の案内をしながら自分一人で凄い喋りまくります。……でも喋っているのは結局、俺だけで橘さんは終始無言でした。まあ、頷いたりはしてくれるんだけどね。

## 《ジーーー……………》

あと、俺へのちら見も止まりません。

とりあえず学校の案内もあらかた終わり教室に戻ってくる頃には、俺は精神的にも肉体的にもボロボロでした。

うん…… 良く頑張ったよ俺。

「よし、だいたい回ったかな…… 今日はこちら辺にしとこっか」

《…………… コクン》

橘さんは何か言いたげな瞳でこちらを見つめてきましたが、静かに頷くと帰り自宅を始めました。

さあ…… てやっと俺も帰れるや。疲れていた俺はとつと鞆を持ち帰ることにしました。

「じゃあね橘さん、また明日ね」

俺は別れの挨拶だけして教室を出たんですが、橘さんからの返事がない……。

「…………… また…………… 後で……………」

‘後で’…………… って聞こえたんですよ、何なんでしょう？

気にはなっただんですが疲れていたし、どうせ聞き間違いだろうと思いいそのまま帰っちゃいました。まあ、大丈夫でしょ…………… たぶん。

さてさて、俺は学校を出て自宅に向かうために自転車をこぐわけですが…………… その前に俺が住んでいる場所について少し説明しときまし

ようか…… 4話目でいまさらかよって感じもありますが、気にしないでいきましょう。

俺が住んでいる街はとっても田舎って訳でもないけど、まあまあ田舎なのかな、たぶんある程度は……とりあえず都会ではありません。んで、俺が通っている高校の名前は第3東高校。昨年に改築と増築でかなりキレイになった……らしいけど、まあ言っても普通な高校だよ。街の人に聞いて回ったら10人中、10人が普通っていうだろう…… たぶん。

そしてこの学校をでるとすぐそこにけっこう大きな商店街がある。日用品やら非日用品、ちょっと危ない代物から今晚のおかずまで、だいたい何でもそろっている。いや〜便利だけど時々危険だからさ…… お買い物の際には十分ご注意ください。

……んで、俺が住んでいる家はこの高校から自転車で約10分、商店街を少し進んでからおもいきり横切りそこから数分進むと大型住宅街がある。そこに俺の自宅がある訳だ。

さて、早いとこ家に帰りますかね。もう今日はクタクタだ。

今日の学校も大変お疲れだった主人公の凜玖君。

でも、これからが本番ですよ。

#### 第4話 自分を褒め称えたい（後書き）

書き忘れておりましたが、この小説>Link<はマサル先生の作品>移り変わる景色の中で<と設定や背景を同じくして頑張っております。

もちろんマサル先生の許可はとっておりますので……………ぜひとも>Link<と共に>移り変わる景色の中で<両方ともよろしく願います。

感想など書いてくださると、とてもとても嬉しいです。

## 第5話 使い勝手が悪い俺と携帯君

さてさて学校を終えた俺はやっと家に帰ってきました。やっとゆっくりにできるよ。

「ただいま〜」

「凜玖！！遅すぎだ！！！」

ええ！？……何で！？

「な、何で……父さんが家にいんの？」

おかしいよ、少なくとも後2、3カ月は帰れなかったはずなのに。

「なんだ凜玖、お前メール見てないのか？」

「メール？」

俺は携帯探して自分の鞆をあさりまくります。おかしいな……ここ2日ぐらい携帯構った記憶がないぞ。……案の定、俺の鞆から出てきた携帯君はあはれにも電池切れになっ

ていました。

電池切れ携帯を見た父さんは深く溜息をついちゃってます。

「凜玖……お前って奴は……」

「しょうがないじゃん……よくある事だよ」

……いや無いか。

「とりあえず大事な話があるんだ」

父さんはあらたまつて俺の方をじつと見てきます。……男に見つめられてもまったく嬉しくないんだけどな。

「突然だけど父さんな、再婚するからな」

へえゝ再婚か………ってええ!?

「さ、再婚!？」

「そうだ再婚だ、最高だろ」

「いや……まあ………」

だ、駄目だ、あまりに衝撃的すぎてコメントできない。

「あと突然ついでに言っちゃうと、再婚相手と娘さんが今日、家に来るからな」

「!?!?!?!」

もう言葉にすらならないよ。

「今日ってのはいつ頃?」

「うゝん、さっき連絡があつたからもう着くかな」

ま、マジですか〜。

ちよ、ちよっとマジで誰かに助けを求めるために連絡を……………つて、携帯君電池切れてるし。

「そ、そんな突然すぎるよ」

「そうは言っても、一応連絡はしといただろ」

まあ、そうだけど……………つかそんな大事な知らせをメールで済ますのは如何なもんかと思っんですが。

俺が1人、頭の中で葛藤していると俺の後ろで車の止まる音がしました。

まさかこれって……………。

「おお？来たか来たか」

慌てている俺を後目に、父さんはさっさと車の方に走って行って話しをしています。息子を置いていかないでよ、1人じゃ行きづらいでしょ。

それから数分後、父さんは女の人を連れてこっちに歩いてきます。なかなか美人だけど……………やっぱ歳は父さんと同じ位っぽいな。

「よぉ〜し凜玖、紹介するぞ、この人が俺の再婚相手だ」

「初めましてだよ凛玖君……私の名前は 橘 奈緒 「タチバナナオ」。本当ならもっと早くに会いに来なきゃいけなかったんだけど……なかなか会いに来る事ができなく

てごめんね。遅くなったけど今日からは私が凛玖君の母親だからね、すぐには慣れないと思うけど……少しずつ時間をかけて頑張っていくからよろしくね。」

「よ、よろしくお願いします」

うわあ、なんて礼儀正しい人なんだ……よくこんな人が父さんの所に来てくれたな、本当に。

「あと……私の娘がいるんだけど、恥ずかしがってなかなか車から出てこなくて……ちよつと家の中で待っててくれない？」

「ん？そうか、まあ最初だから緊張してるのかもしれないから……とりあえず凛玖、家に入ってお茶でも準備しとくぞ」

「う、うん」

駄目だ……話しの展開が早すぎてついていけない。

ただど今、暢気にお茶なんかいれてる場合じゃないのは分る。俺に妹or姉が出来るんだぞ……ヤベ〜〜緊張しまくりだ、待ってられないよ〜〜。

そしてそして……。

「ほら早く来なさい、もう何分も待たせてるんだからね」

「でも、やっぱ、まだ、私……」

「何を今更ごちゃごちゃ言ってるの、早く来なさい」

「……や、やっぱ無理だよ」

さて俺と父さんが居る部屋の扉の向こうでは、さっきから騒がしく言い争いが続いております。正式には言い争いって言うか、踏ん切りがつかない娘を何とか説得しようとする

る母親の奮闘なんだけどね。にしても何かこの声聞いた事があるようないな……。

「ほら、もう行くわよ」

「ううう……」

あ……どうやら母親が勝ったらしいですね。

「やっと連れてこれたわ、ほら隠れてないで！」

「う、うん……」

「……!」

俺はその女の子を見た瞬間、本日2度目であるが言葉が無くなった。俺って本当に情けないというか、使えないというか……自分自身、切実に感じます。

「た、橘さん!？」

まさかの展開、そこに居たのは転校生の橘さんだったのです。こんな展開って実際あるんだね……。

「そつか、2人はもう学校であってるんだつたね」

会ってはいましたが、まったく知らなかったんですよ。

「まあ、でもほら、一応自己紹介して」

奈緒さん?でいいのかな呼び方……とりあえず橘さんに自己紹介を促します。

わあ……橘さんの顔の真っ赤ぶりが凄い。

「え、えつと、た、橘 七夕「タチバナ ナユ」です、これからよろしく願います」

だから展開が早すぎるってば……俺、もう限界……。

こりゃ今日は家でもゆっくり出来そうにないな……。



## 第5話 使い勝手が悪い俺と携帯君（後書き）

すっごい中途半端な所で終えてしまって、申し訳ないです。

## 第6話 嵐の様な我が家

橘さんの自己紹介を聞いてから数分経ちましたが、まだ頭の整理がついてない俺です。

今は4人とも机にすわり、どっからか注文してきた寿司を食べながら、両親だけが和気あいあいと話しているだけで……混乱中の俺はともかく、さつき学校での沈黙状態が嘘の様に自己紹介した橘さんも何も話しません。

「ちょ、ちょっと待って、凄い混乱してんだけど……つまり俺らはもう家族で、明日から一緒に住むってこと？」

「いやいやそんな事はないぞ、父さん達2人は仕事があるから、何時もどおり家にはいないぞ」

俺の質問に父さんは、バカだな～みたいな顔で返事をしてきた。スツゴいム力つく。

「はぁ！？それ本気か！？」

「本気だとも、現に凜玖は今までは1人で家の事をやって来たんだろ、逆に2人で出来て楽じゃないか？」

「いや、そおいう問題じゃなくて……だいたい奈緒さんも良いんですか、娘を置いて行って」

「別に良いって思ってるけど……七夕もお兄ちゃんが出来て嬉しそっだったし……」

「ちょ、ちよつとお母さん!!」

「あ!……ゴメンゴメン内緒だったわね」

橘さんは凄い勢いで奈緒さんを止めに入った。見事な真っ赤顔だ。

「橘さん、本気でイイの?」

俺は、返事を返してくれるか微妙かと思ったが一応聞いてみた。

「……………う、うん、凜玖君が良いんだったら……………」

マジで良いんだ……………ってか学校が嘘の様によく喋るな……………。

「うんうん良かったな、七夕ちゃんも料理とか得意だっけ聞いてるからな……………2人揃えばプロ並だ、たまに帰えって来るのが凄い楽しみになる」

そう、俺は家に両親がいなかったもんだから知らず知らずの内に家事を身につけている……………でも今は関係ないだろ。

「そうそうあと、橘さんってのは良くないわね、兄妹なんだから七夕って感じで呼び捨てぐらいで呼ばなきゃ」

マジですか。

「そ、それはこれから徐々に慣らしいくから今はいいです!」

「そう……………それは残念」

んな、いきなり無理です。ヘタレですからね。

「じゃあ話しも落ち着いた所でそろそろ父さん達は行くからな」

「ええ！？もう行くの？」

「そりやそつだ、明日も仕事がある、今日は有給休暇を使って帰つて来たんだからな」

そりや……そつだけどさ……。

結局、俺らは父さん達を見送りに外に出て来た。

「じゃあ凜玖、家と七夕ちゃん頼むぞ」

「分かつてるよ」

はあ……これから大変そつだな。

「そつだそつだ凜玖君、ちょっと話があるの」

「俺ですか？」

娘じゃなくて俺に話して、そんなに大切な事なんか。俺と奈緒さんは家の前の車から離れて話しを始めた。

「あのね凜玖君、もう分かってるかもしれないけど……七夕ね、凄い人見知りなの」

ああ……やっぱり。

「それはきつとそうなんだろうなって思ってたけど……何だ普通の人見知りとは違う様な……」

「うん、そうなの、七夕はね、特に男性に対してだけ凄い人見知りするの、たぶん過去に経験した事によって……」

俺はその過去に経験した事、トラウマについて聞きたかったが、奈緒さんの思いつめた表情を見ると聞くことができなかった。

「でも、そんな男が苦手なのに僕何かと一緒に暮らして大丈夫なんでしょうか？」

トラウマも気になるが、こっちも凄い気になる。

俺なんかじゃ、逆にその男性恐怖症みたいなのを悪化させてしまうんじゃないだろうか。

「うん……私も凄い心配してたんだけど、今日の凜玖君に対する七夕を見てると何だか大丈夫な気がするんだ、少しは緊張してたけど……あんなに普通に男の子と話す七夕を見たの久しぶりだし……きつと、七夕は凜玖君なら大丈夫って感じる……凜玖君、優しいそうだしね」

優しいそう……か。

「七夕の事お願いね、凜玖君ならきつと七夕の心の支えになれると思うから、七夕を救う事ができると思うから……」

何から救うなんて事は聞かなくても何となく分かる気がした。そして、何だか聞いちゃいけない気さえした。

「分かりました、俺、出来るかぎりやってみます、頑張ってみます」

俺は何だか柄にもなく妹の為に頑張ろうと思いはじめていた。本当に俺らしくもない……。

「おおーい、そろそろ行くぞ！」

こんな話をしてるとも知らない父さんは、車の方から俺らを呼んでいる。空気読めないな――父さんは。

「うん、ありがとう、七夕の事よろしくね……あとあの娘、少し体の弱い所もあるの、もう時間も無いみたいだから……また後で七夕に聞いておいてね、一緒に登下校を自転車に七夕を乗せてしてくれると凄い安心するんだけどな……みたいなね」

「とりあえず、善処します」

「きつと凜玖君ならしてくれると思うよ」

奈緒さんは笑みを浮かべながら歩いて行った。

何だか……この人には全てを見透かされそうだな。

こんな感じで父さんと奈緒さんは颯爽と帰って行っちゃいました。  
残されたのは俺と橘さんだけ。

これからどうなる事やら……………。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0216i/>

---

Link

2010年10月17日15時23分発行